

人口急増のアフリカに芽生える少子化希求

エチオピア南部バンナ社会の変化を追って

Expectation of Low-Fertility among Younger Generation in southern Ethiopia

増田研 (長崎大学)

Ken MASUDA (Nagasaki University)

ken-m@nagasaki-u.ac.jp

北東アフリカにエチオピア連邦民主共和国は現在、サブサハラ・アフリカではナイジェリアについて第2位の人口規模を誇る。ハイレ=セラシエ1世が退けられ帝政が終わった1974年に3,100万人、軍事政権が崩壊した1991年に5,000万人だった人口は、2015年にはついに一億人を超えた。25年あまりで倍増した人口はその後も増加し続けており、国連の予測では2050年に2億人、2100年には3億人に達すると見込まれている。他方で、現在5%ほどの高齢化率も今世紀末には21%に達すると予測されている。

エチオピアのような民族多様性の高い国では、その人口動態を考えると国内における地域差を考慮する必要がある。エチオピア人口保健サーベイ (Ethiopia DHS 2016) によると、エチオピア国内では地域間の合計特殊出生率 (TFR) に大きな差があることが分かる。それによれば農村部における TFR は5.6であるが、都市部におけるそれは2.3と、2倍の開きがある。TFRがもっとも高いのはソマリ州で7.2、もっとも低いのは首都アディスアベバの1.8である。DHSの統計的な精度を考慮したとしても、この開きは大きい。

本発表で取り上げるのはエチオピア南部諸民族州 (Southern Nations, Nationalities, and People's Region) に居住するバンナ (Banna) という民族集団における家族構造と、過去25年におよぶ少子化希求の進行である。発表者は1993年から1999年にかけて断続的に長期間の住み込み調査を行ったほか、その後も短期間ではあるものの、継続して社会変化を記録し続けてきた。

バンナは雑穀栽培と家畜飼養によって生活を送る人々であり、生活の糧を自らの労働によって得る生業社会である。また一夫多妻の家族構造をもつ。バンナの中心的村落であるボリ村 (Bori) において1993年に行った世帯調査では、この村の人口は1800人であり、既婚男性が50人、既婚女性が117人いた。既婚男性のうち妻が複数いるのは29人であり、全体では平均して夫1人につき妻が2.3人いた計算となる。当時のバンナはいわゆるカレンダーに依拠しなかったため、自らの誕生日や生年、年齢を言える人は一人もいなかったが、すでに出産年齢を終えていると考えられた女性27人の平均出生数は5.3人であった (ただしこれは名前が記録できる、生存できた子供のみをカウントしている。当時のバンナにおける TFR はもっと高かったに違いない。)

バンナの家族は「母子ユニット」単位で構成されており、それが農耕と牧畜の労働形態と密接につながっていた。つまり家族構造が生業活動と対応しているため、子供の数は多いほどよいとされたのである。2000年代に入って保健状況が改善されるようになると、乳幼児死亡率の低下とともにバンナにおいても人口が増加したと考えられるが、同時に、若者世代の間で「子供は2人いれば十分」という少子化を希求する志向が生まれてきたことも見逃せない。本発表ではそうした民族誌的な知見を活用しながら、このような価値観の変化がエチオピア辺境部の未来にどのような変化をもたらさうかを考察する。